



# オ

レゴン州に住むパム・ワルドさんは、末期の肺がんで壮絶な痛みに苦しむ

闘病生活を送っていた夫のベンさん（75歳）から「尊厳死を選びたいから協力してほしい」と告白された。2年経つ今も、その日のことを鮮明に覚えている。

「ああ、とうとう来たか、と思いました。嘘がつかない性格の夫だから、これは本気なんだと」

モルヒネ、薬用マリファナ、ホスピスケアなど痛みの緩和ケアは全て試した。余命数カ月を宣告されてから、食べられず、トイレに自力で行けなくなったベンさんは、州の医師が合法的に処方する致死量の薬を飲み、妻や友人に囲まれ自宅で死ぬことを決めた。

オレゴン州では全米で最も早く1997年に尊厳死法が成立。98年から昨年まで752人の余命6カ月以下の末期患者たちが、医師が処方した薬を自ら飲み死亡した。ベンさんとパムさんは共にソーシャルワーカーとして働き、貧困層の人々のカウンセリングをしてきた。ベンさんは、自分の身体が全くコントロールできなくなった

ロサンゼルス在住ジャーナリスト

長野美穂

Miho Nagano

from

# 米国

## オレゴン州の尊厳死法で 末期がんの住民たちが 自ら選んだそれぞれの死



オレゴン州民のパムさん。2年前に「尊厳死」を選んだ夫のベンさんの灰を、夫が造った庭に埋めた

Miho Nagano

時、決意を固めた。ベンさんの尊厳死に必要な書類のサインと薬の処方をしたのが、隣のデイビッド・グルブ医師だ。彼はこれまで約15人に尊厳死の薬を処方してきたベテランだ。オレゴンでは合法だが、自殺を禁じるカトリック教会や一部の医師らが強く反対する「死の補助」をなぜ何件も手がけるのか？

20年前、グルブ医師の隣の家の男性が骨の末期がんで苦しんでいた。ある日、その男性の息子が「助けて」と呼びに来て、隣の家に入ると、その男性がシヨットガンを口に含み引き金を引いた後だった。

「その日、決意したんです。自分の患者に絶対にこんな悲惨な死に方はさせないと」とグルブ医師。

彼は今、尊厳死を選ぶ患者を助けるコンパッション&チョイスズというNPO団体の医療ディレクターで、無給ボランティアだ。

とうとう当日。パムさんは、ベンさんの希望で、友人たちを自宅に招いた。カプセルから出した薬

を液体と混ぜて、それをベンさんが飲むのを全員で見守った。

「ベンには全く躊躇せず飲み干し、これで楽になれるという満ち足りた表情をし、眠るようになって逝きました。私は死をずっと怖いものと思ってきたけど、苦しみから解放されたベンを見たら、死が怖くなくなりました」とパムさん。

写真家で、末期の膵臓がんだった夫のデイックさん（76歳）が2002年に尊厳死を選んだのをサポートしたのが妻のグロリアさんだ。夫が余命3カ月を切り、身体の機能が失われていく中、夫が願う尊厳死を叶えるには、グロリアさんが必要な書類を揃えるのに奔走するしかなかった。法の下、本人の精神が正常で適切な判断ができる状態だと医師から判断されないと尊厳死は選べない。意識を失ったり、自力で薬を全部飲めないほど弱れば実行はもう不可能だ。

「愛する夫が痛みで苦しむ抜く3カ月か、彼が望む死に方かと考えると答えは一つでした」とグロリアさん。当日彼女が薬を薬局に取りに行く時、夫は「みんなにドーナツを買ってきて」と言い、娘や孫に囲まれてその時を迎えた。

賛否両論を呼ぶ尊厳死法。現在はオレゴン、ワシントン、バーモントの3州で合法となっている。

